

- (3) 測定結果が確率的に有意であるためには如何なる條件を附
属させるかについて数理統計学の立場から研究したのが本論
である。

16. 主訴と診断について

崎野 滋樹

従来のように疾病の形態的の異同のみによる分類より更に進歩
して、家系、出生順位、既往症との関連に於て又入院後の診断と
の関連に於て主訴による診断の新しい分類を試みようというのが
本予備調査の主たる目的である。併し調査人数の小なる爲主訴
による系統的分類表を作るまでに至らなかつたが、次の事は大体
確かなようである。

1. 乳児、幼児の結核は殆んど家庭内感染である。
2. 疾病と出生順位間には有意な相関が存在する。
3. 主訴と予後の関係については早産、分娩異常のとき最も不
治、死亡の疾病にかゝり易い。先天性白痴とカリットル
氏病は殆んどこの主訴によつて起る。
4. 白血球 1,2000 以上の疾病を調べた結果伝染病（結核を含
む）が 50 %、百日咳肺炎が 13 % という結果を得た。
又白血球の 6000 未満の患者は殆んど腸チフス患者であ
った。
5. 貧血（ヘモクロビン値が 70 % 以内のもの）患者の疾病
分類を行つた結果、伝染病による貧血 55.4 %、消化不良
10 %、Leukämie 10 % という結果を得た。